

氏 名 杉 山 京 子

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大甲第299号

学位授与の日付 平成10年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 『四合院家屋の文化人類学的研究

－人間と自然との相互作用の視点から』

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 中牧 弘允

助 教 授 小長谷 有紀

助 教 授 塚田 誠之

教 授 三浦 國雄（大阪市立大学）

## 論文内容の要旨

本論は、漢族社会における住居空間の特質を解明する目的で、漢族に特徴的な建築様式とされている四合院家屋を対象としてとくにとりあげ、伝統的な風水思想の背景を理解しながら、人間と空間との相互作用の分析を行い、家屋内部に伝承されてきた空間の文脈を把握しようとするものである。すなわち、四合院家屋のなかに風水思想がどのように具現化されているかについて、儀礼的行為などを通じて文化人類学的に解明する。

漢族家屋を対象とした従来の研究蓄積をみると、建築学や地理学および文化人類学におけるアプローチには、それぞれ異なった研究傾向が認められる。例えば、建築学の場合には、主として現存する伝統的な家屋の様式や構造など、いわゆるオーソドックスな実証的考察と建築技術の解明に焦点が当てられてきた。また、地理学の場合には、もっぱら閉鎖中庭式家屋の世界的分布と系譜のように、いわゆる家屋の分類作業が行われた。一方、文化人類学の場合には、主として家屋と家屋を取り巻く家族関係や社会的ヒエラルキーおよび社会慣習との関係の分析が行われ、総じて家屋と親族との対応に重点をおいた考察が蓄積されてきたといえよう。いずれの場合においても、家屋さらに都市など建築空間の根幹に関わる風水を積極的に取り組んだ緒についたばかりである。

風水思想とは、地形、大気の循環、水の流れ、方位などから、環境と人間との相関関係を精確に知ることによって、自然と調和した人間の生活を組み立てようとする特異的な地理学であると言われている。すなわち、風水思想は、自然を人為によらぬ客体として眺めながら、その自然と人間との一体化をめざした、人間の空間的営為に関する技法や規範の集大成である。本研究は、まさにこうした風水思想の理念である人間と空間との相互作用という視点から、漢族の四合院家屋を分析する。

本論の研究方法としては、静態的・動態的という二つの側面から四合院家屋を考察する。静態的な側面の考察では、現地調査からえられた家屋プランを事例に、その平面配置を明らかにしたうえで、年中行事にみられる接客や〈接神〉（神迎え）の活動によって明示化される静態的な空間秩序を把握する。動態的な側面の考察では、婚儀ならびに葬儀という対比的な二つの通過儀礼を取り上げ、儀礼のプロセスを明らかにしながら、四合院家屋における動態的な空間秩序を把握する。このように、儀礼的行為を介在させることによって、家屋における静態的・動態的な空間秩序を明らかにしておいたうえで、風水思想との対応関係を検討しておく。

本論の構成は次の通りである。

第1章では、研究史を踏まえて研究視点を明示し、研究方法を述べる。調査地の概要についても言及する。第2章では、現地調査例からえられた家屋プランを提示し、それに基づいて四合院家屋の基本構成について概説する。これを受けて第3章では、四合院家屋の構成要素のなかでとりわけ重要な役割を果たしていた庁堂、中庭、大門という三つを抽出して、客の接待や神を迎える儀礼的行為の実践を考察することによって、三つの構成要素の建築的な機能を検討し、静態的な空間秩序を明らかにする。

続いて、第4章と第5章では、婚儀と葬儀を取り上げ、時間と空間の経過に伴って、儀礼の主演である嫁や死者（長老）にもたらされる状況の転換を読み取ることによって、四合院家屋と儀礼との相関関係を分析する。たとえば、婚儀において、一人の女性は四合院

家屋を北上すると同時に、垂直方向でも上昇し、少しずつ身分を変更しながら、最終的に嫁という地位に達する。一方、嫁の「北上」の移行とは対照的に、死んだ長老は「南下」する。この移行は、遺体と死霊とが漸次分離する過程でもある。遺体の「門出」の日まで、合計三回にわたって遺体と死霊の分離が行われ、死霊の一つは冥界へいき、一つは祖先霊となり、一つは墓地にたどり着く、という理解が達成される。こうした儀礼を成り立たせている空間としての四合院家屋の秩序が確認される。

第6章では、以上のような空間秩序を風水思想の視点から再検討しておく。風水思想において自然界からえられるエネルギーを意味する「気」は、四合院家屋の内部では、正庁から発して、北を上位とする空間秩序に従って南へ流れてゆくと考えられる。あたかも水が高きから低きに流れるように、四合院家屋は秩序づけられているのである。このような空間秩序に従って、儀礼行為の意味もまた風水思想における「気」の概念から再解釈する可能性が生まれる。例えば、婚儀の場合、家屋内部を「北上」する女性は、絶えず婚家への贈り物を移入しながら、婚家のエネルギーを吸収することによって、族内の地位を上昇させてゆくと考えられる。また葬儀の場合、死者の「南下」に伴って、生者（遺族）が絶えず一方的に死者への供物を献上することによって、その反対寄付として子孫繁栄のためのエネルギーを受け止めるという、生者と死者との互酬関係が約束されるとみなされる。

第7章は総括として、まず、四合院を単体建築としてみる。次に、四合院と生活行為および儀礼活動という、三者間の「相互作用」について動的に捉える。また、四合院と「明堂制度」、四合院と身体論、四合院と風水思想らとの関連について言及し、より総合的に四合院家屋における文化的なコンテクストを把握してみる。さいご、本研究についての今後の課題を述べておく。

このように、本論は、漢族の文化に関する空間人類学的研究の試みとして、四合院家屋をめぐって、家屋と生活、家屋と儀礼、家屋と風水との相関関係について、平面的・立面的、そして広域的という多角的な考察を通して、風水思想を根底にした漢族社会における固有な空間理念、空間秩序、空間構造の特徴を突き止める。さいご、人間、空間、自然という三者間の「相互作用」の分析を加えることによって、漢族社会にある従来なく天人合一という伝統的な文化理念を具体的かつ鮮明に浮かび上がらせたのである。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は、漢族に特徴的な建築様式とされている四合院家屋をとりあげ、そこでくりひろげられる接客・接神・婚儀・葬儀の象徴的儀礼行動の分析をとおして、四合院の空間構造との密接不可分な相互関係をみちびきだし、さらに四合院建築の背後にある思想として風水が介在することを論じ、その風水原理と家屋・村落・县城の構造的類似性（同構）を考察したものである。

第1章では、建築学・歴史学・地理学・文化人類学などの先行研究を批判的にふまえ、風水思想からの分析視点を提示し、調査地の河北省天津县城と山西省汾河流域の選定理由を述べている。第2章では、調査地の概要と伝統的家屋の地域性を指摘し、典型的な四合院家屋の平面プランを再構成して示したうえで、庁堂（広間）・院子（中庭）・大門（表門）が四合院の中軸上にあって住居空間を段階的に分節化しているという基本的な特徴について概説している。

第3章では、庁堂・院子・大門における接客・接神の空間的利用を記述し、「北高南低」、「東高西低」、さらに「中心即ち高位」という静態的秩序原則をみちびきだしている。第4章と第5章は本論文の中心的部分であり、それぞれ婚儀と葬儀を対象としている。まず、婚儀においては嫁入りする女性が「新人」から「新姑娘」、「新姑娘」から「新媳婦」、「新媳婦」から「少奶々」という三段階を経て地位が転換する。それにともない、新婦は実家から夫家の「外庁」へ、「外庁」から「洞房」へ、「洞房」から「後庁」へと空間移動しながら、それぞれの場でそれにふさわしい儀礼がおこなわれる。四合院において新婦の地位と彼女の空間的移動が対応することを明らかにするとともに、この過程において、段階的に種類や内容の増加する儀礼的な贈与交換がなされ、婚姻をめぐる人間関係の統合・強化がはかられていることを分析している。第5章の葬儀では、男性の長老の死を想定し、その葬儀において遺体の空間移動が「内庁」から「外庁」へ、「外庁」から「後庁」へ、「外庁」から「墓地」へという局面に対応して、死霊がそれぞれ「冥界」「位牌」「墓地」に向かって分離・移行することを、儀礼の象徴的・空間的分析をとおして論じている。さらに、供物の内容をとおして遺体・死霊の3方向への分離と死者と生者との分離を象徴的に解釈する理解を示している。

第6章においては、四合院が風水思想にもとづいて構成されていることを解説しようとする。まず、庁堂（広間）・院子（中庭）・大門（表門）がそれぞれ「龍穴」「明堂」「水口」に対応することを主に文献にもとづいて論じ、村落や县城においても風水立地と風水配置に「四神相応」の同一構造が認められることを自身のフィールドワークにもとづいて指摘している。そして第7章では広いコンテクストのなかで四合院を位置づけようとし、周の明堂制や風水的身体論との関連を示唆し、今後の課題を提示してとりまとめている。

以上のように、本論文は、四合院家屋を限定的にとりあげ、儀礼行動の分析をとおして空間構造との対応関係をみちびきだし、それを風水思想と関連づけて解説しようとする点に、従来の四合院研究や風水研究にはあまりみられない特徴がある。とくに婚儀と葬儀の象徴人類学的分析から「儀礼風水」あるいは「祭祀風水」とでも名づけられる視点を提示

したことは注目される。また、四合院・村落・県城の立地や配置に、風水にもとづく構造的類似性が存在することを指摘したことも重要である。ただし、論証の方法においては、文献的な実証やインフォーマントの提供する情報の分析において説得力に欠ける部分もあり、また風水思想の歴史的な検討、研究対象地域の拡大、比較の視点の導入など、今後の取り組みのなかで解決されるべき課題も存在する。とはいえ、本論文がモデルとして提示した視点は独創的であり、四合院の重層的・動態的な空間構造の解折は人類学的にもすぐれている。

以上のことから、本論文は学位を授与するに値するものと認定する。